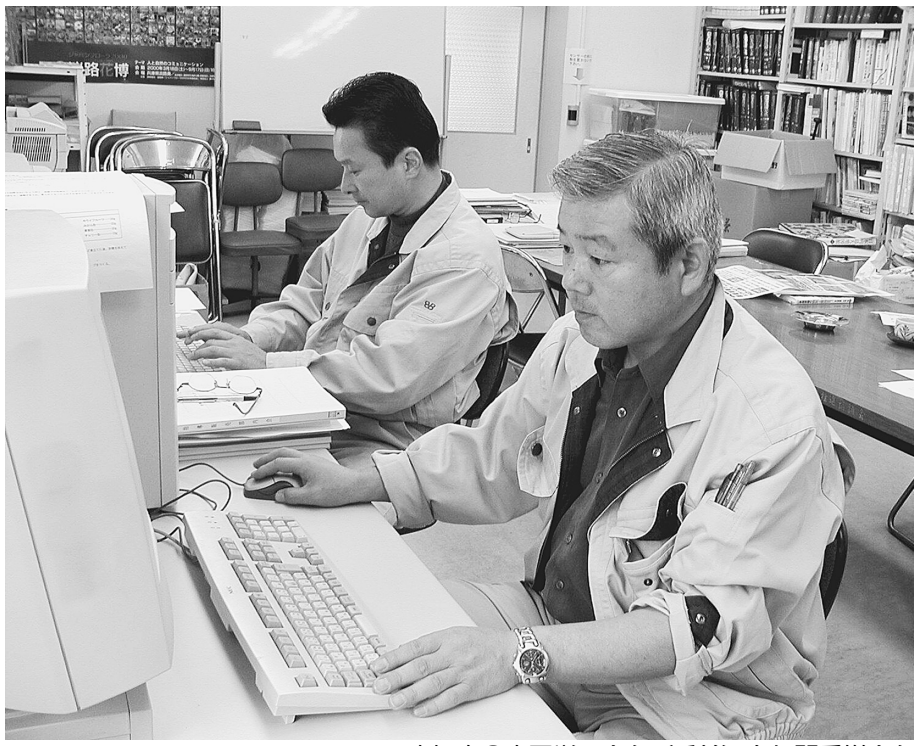
に変えた！ JA高知市の挑戦

農協の営農指導・購買事業はもちろんのこと、共済事業にも「農業技術大系」の各編、『病害虫診断防除編』『病害虫防除・資材編』、それに『CD－ROM版　農業技術大系』『CD－ROM版　病害虫・雑草の診断と防除』が役立っていると聞いて、思わずその農協に電話していた。

その農協とは、商系が強い地域で営農指導体制充実に取り組んできたJA高知市（次面囲み記事参照）である。



JA高知市の中岡栄一さん（手前）と矢間秀樹さん

◆非農家もたくさん相談にやってくる！

JA高知市営農指導課の中岡栄一さんは、記者を笑顔で迎えてくれた。各支所への『CD－ROM版　病害虫・雑草の診断と防除』設置を積極的に働きかけてくれた方だ。案内してくれた営農相談室の書棚には、相談に応じるための書物がびっしり並んでいる。隣は分析室。

「ここ（本所）もそうですが、市街化が進んだ地域が多いですから、まあいろんな人が来られます。もちろん組合員以外も。そんなとき、ちょうど営農指導員がいればいいんですが、現場回りが多いですからいないことが多いでしょ。でも、パソコンをちょっといじれる人がいれば『病害虫・雑草の診断と防除』のCDなら、お客さんと一緒に原因をさがしていけますからね。支所とお客さんが仲良くなるんですよ。またあとできてくださいだなんて、せっかく来てくれたお客さんを突き返すわけにはいかんでしょうッ！」

CD－ROMのおかげで購買や金融の職員もちょっとした問い合わせには応えることができるシステムに変わりつつあることに満足げだ。

「使い方の指導をしたんですが、なかには、指導員よりも使い方に詳しい女性もでてきたんですよ（笑）」

中岡さんも驚くその女性、この春まで高知駅周辺の市街化ど真ん中の支所の購買担当だったOさんである。

◆支所購買の女性職員が大活躍

「CDが入るまでは、パソコンを使うといったって案内文書つくりくらいかしら。私のいた支所は市街地の中だったから、定年で退職して家庭菜園を楽しんでいる人や、借地で野菜を作っている人が多くて、『こんなん出たんやけど？』って、葉っぱとか持ってみえるんです」

この春から本所勤務になったOさんは、お客さんと一緒にパソコン画面をみながら、写真を拡大したりして、原因を捜していったそうだ。

Oさんの話をもとに、訪ねてきたお客さんとのやりとりを再現してみよう。

お客と一緒に病名発見！

「ちょっとOさん、これなんやけどなあ、何じゃろうか…」

（と、おばあさんが野菜の葉っぱらしきものを持参）

「何つくっちゅうがね～？」

「コマツナじゃがね。葉っぱの裏側に小さな白い点々が出ちょろうが」

「そうやねえ」

（ゴソゴソと机の引き出しからCD－ROMのお皿を取り出すOさん）

「そりゃ、ナニ？」

「野菜なんかの病気とか害虫とかわからんとき、調べるもんや。便利やで～」

（パソコンのCDを入れる場所にそのお皿をセット。カチカチッとクリック。パソコンの画面には『病害虫・雑草の診断と防除2002』が浮き上がる。おばあちゃん、目を白黒…）

「コマツナやったねえ、エーッと…」

（目次の上の方にある「診断」をクリック。切り替わった画面の「病気・害虫診断の目次」で「コマツナ」を捜して…）

「多分病気や思うわ。病気をクリックして…と」

（さらに「葉」をクリック。葉の症状の図と特徴が一覧になったものが現れる）

「葉っぱの裏側やったねえ？」

「そうじゃ～」

「白い点々じゃったねぇ」

（おばあちゃん、画面をのぞき込む）

「多分、白さび病やと思うわ」

（ここで、その表の右端の「白さび病」の文字をクリック。画面に葉表の症状、葉裏、一枚だけのアップ、病原菌のカラー写真が何枚も現れる）

「おばあちゃんの葉っぱに出とるのと似とろうが」

（写真参照。その下には、白さび病の診断法が詳細に書かれている）

「そうやねえ、これに間違いないわ！」

（二人の共同作業で発見したムードに）

「その白さびとかいうやっちゃなあ、どうやったら抑えられるんや？」

（Oさんは、その画面の一番上にある「防除法」のマークをクリック。防除の方法が、「ポイント」「初発時」「激発時」ごとに、診断と防除法とで書かれている）

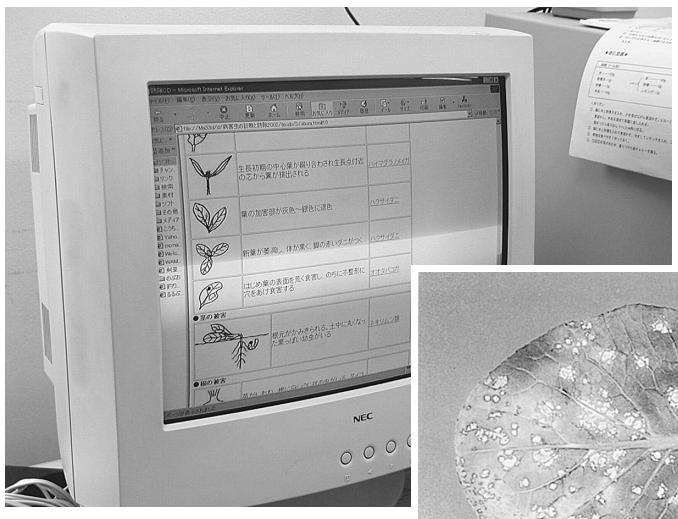
「コマツナの白さび病にはなあ、ユーパレン水和剤が効くらしいよ。でもなあ、使えるのは収穫二週間前や」

「農薬は使いとうないきに…」

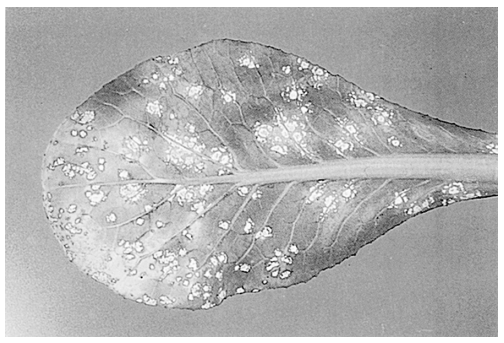
「待ってや～、あるある『農薬以外による防除』。え～っと、『多湿状態がつづくと発病が多いので、排水を考慮して…』、種子の量減らして、ビニールなどで雨に当たらんようにするとええらしい。病気の出ているのは土に埋めないかんよ」「そうか～…」

（おばあちゃんも納得して）

「ありがとうな～」



←相談窓口で大変便利な「絵目次」からの病害虫診断



↓白さび病の症状の写真の一枚（写真の下に詳細説明がある）

わからなくても後でフォロー

もちろん葉っぱだけでは原因がつかめないときもある。そんなときは、小さな野菜であれば根っこごと持ってきてもらう。どうしてもわからなければ、帰ってきた指導員に頼んでその人の所に出かけて原因を確かめてもらう。

緊急の場合は「病害虫・土壌診断依頼書」（左図）に、お客さんから聞き取った症状などを書き込んで、本所の営農指導課にファックスして診断をあおぐ。本所にいた指導員が、お客さんに連絡して、畑に直行なんてこともある。

相談は土曜日に集中する。だから、土日休日が原則とはいっても、完全に相談窓口を閉じるわけにはいかない。JA高知市では、土曜日は当番制にして、購買の職員であろうと、金融の職員であろうと、一人は相談窓口にいて、お客さんからの営農相談に応じることにした。だから、一番多い病害虫の相談も、パソコンにさわれさえすれば、マウスだけで原因の病害虫を捜せる診断のCD－ROMは大助かりというわけだ。

（次面へつづく）

病害虫・土壌診断依頼書

	依頼日　年　月　日		受付日 確認印
支所名		担当指導員名	
生産者氏名		電話番号	
住所			
作物名		品種名（種苗会社名等）	
圃場番号			
播種日			
定植日			
施肥量防除薬量	元肥（肥料名・量等）	追肥（肥料名・量等）	使用薬剤名　使用量
管理状況等			
症状等			
気の付いた点			
診断結果及び考察			診断者名

増刊　年4回・年間購読料3600円（前払いで送料サービス）

現代農業

月刊　年間購読料9600円（前払いで送料サービス）

定価900円（〒120円）★自然から人間へ、農村から都市への呼びかけ—農的暮らしによるライフスタイル革命を全国から伝える。

定価800円（〒120円）★地域づくりの総合実用誌。有機栽培、産直・直売、食品加工、民間療法、食農教育など農村からの発信

シリーズ既刊　●各900円

2002年8月増刊

青年帰農　若者たちの新しい生きかた

農山村に生きる場を求め、自給自足の農的暮らしをベースに自己実現をはかる青年たちと農家・地域の支援

2002年11月増刊

スローフードな日本！

地域の自然、人の力が支える食の健全さ。食から見えてきた「スロー」な生き方。結城登美雄、島村菜津他

バックナンバー

11月号「秋の野山」の幸が売れる
10月号土肥特集・苦土がスゴイ
9月号手作り果実酒で健康、酢防除
8月号塩で増収・高品質
7月号国産麦の魅力、いよいよ防除特集・酢が効く、味ものる
6月号
5月号青森発「産地」は変わる
4月号竹林の7つの宝

2003年1月号

ドブロク復権

生活文化で客を呼ぶ岩手県「ドブロク特区」宣言／世界の自家醸造事情／手づくりの秘伝公開他

2002年12月号

「無登録農薬」問題

問題の背景と使用の今後を巡る基礎知識／農薬は食の安全を脅かしているか／「食の安全性」への視点他

ご注文は　農文協（社団法人 農山漁村文化協会）〒107-8668　東京都港区赤坂7-6-1　TEL.03-3585-1141　FAX.03-3589-1387　振替00120-3-144478　URL http://www.ruralnet.or.jp/　価格は税込

ITが都市型農協をわが町の農協

◆地域の防除ブックを作成。功を奏した黄化えそ病退治作戦

「あのときは本当に助かりました…」

中岡さんは「メロン・キュウリ黄化えそ病について―問い合せに関する対応マニュアル」（写真）と書かれた冊子を持ち出してきた。

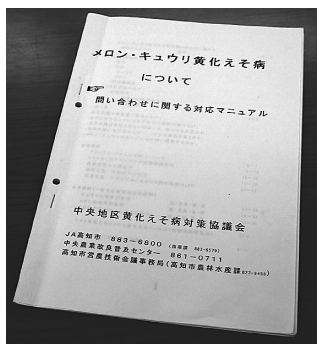
「なんかおかしい…といって、農家がキュウリとメロンの葉っぱを持ってきたんです。葉っぱの葉脈が透き通ったみたいになっていて、中にはポチポチとモザイクが現れているものがありました。平成一〇年に高知県に入ったといわれていたミナミキイロアザミウマが媒介するウイルス病の黄化えそ病じゃないか」

中岡さんは、高知県農業技術センターで「黄化えそ病」であることを確認すると、すぐに普及センターと郊外のキュウリとメロンの団地をくまなく回った。治療薬はない。発生していた株をすぐに除去。そして、病原ウイルスを媒介するアザミウマ対策を徹底する。そのときに作成したのが、中岡さんが持ってきた冊子だった。

その冊子には、単行本『ミナミキイロアザミウマ』（農文協刊）の絵解き部分、それに、『CD−ROM版　病害虫・雑草の診断と防除』で検索して得た防除情報がびっしりと詰め込まれ、彼ら自身が現地で撮影した黄化えそ病の症状のカラー写真などが組み込まれていた。

JA高知市、普及センターが一体となった素早い対応が功を奏して、防虫ネットや紫外線カットフィルム、マルチ、青色粘着リボンなどの導入も進み、それ以上黄化えそ病の被害が拡大することはなかった。

しかし、この経験は、市街化農協にとって重要なことを教えてくれた。



黄化えそ病の緊急対策パンフレット
（＊注）著作物からのコピーや印刷する場合は著作権が発生する。事前に必ず出版元に連絡をとること。なお、農文協では、農業総覧や大系のデータを利用して地元にあった本やパンフレットの制作を受託している。遠慮なく相談してみるとよい。

◆菜園愛好家にも協力してもらわないと地域の病害虫は防げない

「ハウス団地の農家は病害虫の情報が入るのですが、市民農園や家庭菜園の人たちにはなんにも伝わらない。農薬は使いたがらない人が多いですから、この病気の恐ろしさがわからないと、ついついそのままになって、ウイルスを媒介する害虫の巣になってしまう。だから、この地域に黄化えそ病をなくそうとすれば、いわゆるプロ農家だけでなくて、こうした一般の人たちにも協力してもらわないといけないのです。そのときに日頃から支所の窓口でも営農相談をやってきた積み重ねが生きたんですね」

中岡さんたち営農指導課が音頭をとって、なんと家庭菜園向けのパンフレットをつくり、農協、市役所、公民館、さらには町内の回覧板でも回してもらった。そして、営農指導員が市民農園に出向いて講習する。

「こんな小さな虫なんて見えないですよ、ふつうは。だから、市民農園に出かけるときはルーペをたくさん持っていき、キュウリの花にタバコの煙を吹きこんでアザミウマを這い出させて、それをルーペで見てもらったんです」

ルーペで覗いた人から「オーッ！」という声が挙がる。そうして、この虫が黄化えそ病というウイルス病を媒介すること、いったんかかったら治す薬はないこと、などを説いていく。

「『CD−ROM版　病害虫・雑草の診断と防除』のいいところは、農薬以外の防除法もきっちりと書いてくれていることですね。市民農園の人たちに対策を説明するための情報もあって、本当に助かりました」

営農指導課課長の矢間秀樹さんは、「日頃から市民農園や家庭菜園を楽しむ人たちとつながっていたことが大きかったと思います」と述懐する。

「うちだって営農指導員の数を増やすわけにはいかない経営状態です。だからこそ、購買や金融の人たちでも活用できるこのCD−ROMみたいなものが必要なんです。地元に密着していくためにも、こうした情報がほしいんですよ」

中岡さんに、「来年（二〇〇三年）四月からは、農文協のホームページで新農薬情報や防除情報などリアルタイムにアップしていくことになります」と伝えたら、「それは助かるなあ。このあたりでも家庭菜園でマイナーな作物や、登録農薬が一つもない花がつくられているんです。安全性が認められていれば登録拡大の動きを、ぜひ応援してください！」と激励された。

◆市民のための農協だからバージョンアップ代は市も援助

本所支所あわせて、JA高知市には一六セットの『CD−ROM版　病害虫・雑草の診断と防除』が利用されている。バージョンアップ代金は年に一六万円。ところが、JA高知市の場合は、なんと高知市から「環境保全型農業」の技術予算五〇万円のうち半額を農協に出してもらい、試験圃やCDのバージョンアップ代も含めた経費として農協で毎年予算化されている。だから、いつも最新の情報を農家だけでなく、市民全体に提供できる。日頃の積み重ねが、高知市民のための農協として認められたのだろう。

「最近、農協に組合員が帰ってきています。地元の業者さんが、出作が増えるにつれて郊外ばかりに目がいくようになったんです。生産団地をねらうほうが効率がいいですからね。その代わり、これまで業者に情報を提供してもらっていた市街地の農家が困ってしまった。それで、農協に戻ってきているんです」

矢間さん、中岡さんは口をそろえる。

ポスターも作られ、公共施設各所に貼られた。

市街化の中の農協

JA高知市

JA高知市は昭和六十四（一九八九）年、県都高知市と土佐山村、鏡村の一市二村の一四単協が合併してできた。組合員数約一万四〇〇〇。一七ある支所には営農指導員と購買担当が各一名ずつ配置されている（金融特化支所は除く）。本所には八名の営農指導員が配置され、支所で対応できなかった質問にも答えることができるようになっている。

市街化されて農地は減り、出作で栽培されている施設野菜産地が市の中心部を囲むように広がる。

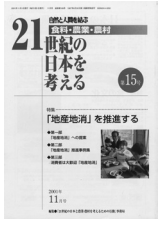
JA高知県連のホームページによると、JA高知市は「都市型」農協と位置づけられている。金融中心の農協を想像してしまうが、ここJA高知市は様相が異なる。本所の営農相談室には、四台のパソコンが設置され、書棚には「農業技術大系」の『土壌施肥編』『野菜編』『果樹編』『作物編』『花卉編』、「農業総覧」の『診断防除編』『防除資材編』『花卉病害虫診断防除編』がきちんと加除されて並んでいる。そのほかにも、ちょっとした問い合せに応えるために、単行本の『庭木の病気と害虫』『庭先果樹の病気と害虫』『家庭菜園　草花の病気と害虫』『家庭菜園の病気と害虫』『原色・花の病害虫診断』などが積み重ねられている。さらに、パソコンには『CD−ROM版　病害虫・雑草の診断と防除二〇〇二』がインストールされ、画面には『CD−ROM版　農業技術大系二〇〇二』の検索のためのショートカット。もちろん支所（金融に特化した二支所以外の一五支所）にも、すべて『CD−ROM版　病害虫・雑草の診断と防除』が設置されている。

問い合わせには、パソコンを使ったCD−ROM、紙の技術大系や総覧、単行本を駆使して答える――そんな雰囲気が伝わってくる農協だ。

本所相談室の書棚には使い込まれた『診断編』『防除資材編』『花卉病害虫診断防除編』のほか「農業技術大系」各編がズラリ並んでいる

農文協　定期購読受付中　〈地産地消〉の地域づくり

21世紀の日本を考える
〈食料・農業・農村〉
★「農村空間」から人生80歳時代の新たなライフスタイルを提言するオピニオン誌。行動呼びかけ人・内山節、川勝平太ら／季刊、A5判、400円、年間1600円
【19号】直接支払制度をどう活かすか
第2弾―高齢化集落を元気づけるために
【2002年11月号】高齢化が進む集落　活性化への提言／地域再生への取組み・先行事例集／農業の多面的機能を増進する活動／本誌14号で紹介の先行事例・継続追究
【18号】高齢農業者の〝生涯現役〟を支援する
【17号】農を基本とした〝農工商連携〟の地域づくり
【16号】自治体の支援ですすめる都市と農村の交流
【15号】「地産地消」を推進する
【14号】直接支払制度をどう活かすか



農村文化運動
★「農」の立場から、自然と人間の対立関係の克服と新しい地域社会形成の道を探る、農家や研究者の交流誌。編集・発行・農文協／季刊、A5判、400円、年間1600円
【166号】21世紀の教育を地域から問う
「非文字文化の再興」をキーワードに
【2002年10月号】「掛川哲学塾」第5回夏のセミナーから／哲学者・内山節、国立民族学博物館教授・高橋敏、掛川市長・榛村純一、新潟大学教授・大熊孝、東京農工大教授・鬼頭秀一
【165号】「JA・IT研究会」第二回・第三回研究会の記録
【164号】食農教育で農都両棲の地域づくり
【163号】「JA・IT研究会」第一回研究会の記録
【162号】「総合的な学習の時間」の理論と思想

食農教育
★「総合的な学習の時間」の総合誌。地域と連携した深い学習を実践から追究。編集・発行・農文協／隔月刊、A5判、800円、年間4800円
【23号】食で深まる国際理解
本場インドの人と作る地場産野菜カレー／ALT（語学補助教員）との郷土食交流で地域学習を国際理解につなげる他
【22号】「売る」から何を学べるか
【21号】「食べる」の向こうに見えるもの
【20号】パソコンで深める体験学習
【19号】「総合」で教師が変わる
【18号】校区探検の技術

ご注文は　農文協（社団法人 農山漁村文化協会）〒107-8668　東京都港区赤坂7-6-1　TEL.03-3585-1141　FAX.03-3589-1387　振替00120-3-144478　URL http://www.ruralnet.or.jp/　価格は税込